

淨土

1977-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月十回、日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別投函業務)第三三三号
昭和五十二年十月二十五日印刷 昭和五十二年十一月一日發行
第四十三卷 第十一号



S.Ku

読書の秋によせて

秋は読書に適した季節です。小生も先日またま、ドロシー・ブリトンさんの『ワルツと囃子』という、実業の日本社から出ている



外国と日本の習慣のちがいを書いた本を微笑しながら、二四八頁をいっきに読んでしまいました。そのなかに書いてあった記事のなかから、御紹介します。まずドロシー・ブリトンさんは、横浜で生まれ、日、英、米三国で教育をうけた方です。NHK教育テレビ「中学英語教室」を約十年間担当され、とくにアイリッシュ・ハーブのひき語りによるイギリス民謡が親しまれました。著者はフランスの有名な作曲家ダリウス・ミヨーの弟子で、作曲、編曲の腕前は一流です。現在は神奈川県葉山町にご主人のセシル・パウチャー卿とご子息の三人で暮らしておられます。

その中の話に、アメリカ人が日本を旅行して、ある仏具屋で、金と銀の造花の蓮の花をたくさん買って、アメリカへ持って帰り、客間にかざった人があったそうです。またある日本の方がニューヨークで、アメリカ人の家にディナー・パーティーに招待されたとき、食卓に、座

席札のつもりで、小型の位牌がぞろつと並んでいたもので、ゾーッとしたそうです。日本でも大きな宴会では、座席にお客さんの名前をのしるしてありますが、アメリカでは、できるだけ変わった形の札立てとか、札そのものを使うことがとてもシャレたことになっておるそうです。そこで、このアメリカ人は、日本に旅行をしたときに、仏具屋に入ってみて、それらの小型の位牌をみつけ、それが宴会用の座席札に大変よいと思ったでしょうし、また何回も使用出来ると思ったことでしょう。

けれども、その日本人のお客さんにとつては、自分の名前が書いてある位牌を目の前にしてごはんを食べるのは、よい気持になるはずはなく、ゾーッとすればなしかったです。

このように習慣のちがいがから来るのですが、我々でも外国から買って来た骨董品など、手洗いで使っている水指しを、床の間においておくことなどがあるかも知れません。

(佐藤行信)

十一月号



浄土門といふは、この娑婆
世界をいとひ、かの極楽を
ねがひて、善根を修する門
なり —『三心義』

目次

中国好日……………安居香山……(2)

吉田健一さんの思い出……………白幡憲佑……(8)

＜人生読本コーナー＞こころの師……………津田弘……(23)

＜ふるさと紀行＞道南の語り草

有珠山噴火・室蘭満岡寺・覚道上人…飯島英徳……(28)

いのちを考える⑧＜労働＞

青年の勤労観について……………森宗平…(13)

パート・タイマー哀話……………佐野敦子…(18)

働くということ……………(22)

＜読者の声＞信仰への道

法然上人の問答から教えを求む(二)……………吉村孝……(32)

＜表紙裏・巻頭言＞読書の秋に寄せて……………佐藤行信

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



中国好日

やす い こう さん
安居香山

(大正大学教授・文博)

一、自力更生

上海は低気圧のお蔭で、思ったより涼しかった。八月二十二日、空港に降り立った時は雨が降っていた。そのせいか、大陸的猛暑はどこかに消え、真夏と言っても、汗はでなかった。それから二週間、私は上海—鄭州—新郷—大寨—石家荘—北京と、中国を縦に走ったのであるが、北京で一日大変暑い日があった外は、楽しい旅で終った。

始めて訪れる中国であつたので、どこが変わり、何がよくなったのか比較しようもなかったが、私がかつての中国として聞いたり、読んだりした中国の影はどこにもなかった。そしてそこにあるものは、新生中国の躍動だけであつた。

私は、町や村で多くの中国の人びとと接し、語り合った。彼等は異口同音に、

「自力更生、堅忍不拔」



烈志陵園（石家荘）
—毛沢東筆碑文—

を強調した。何事も自力の力で成しとげ、完遂するまでは止めないという意気込みなのである。不毛の地に農地を開拓し、今や中国では、「農業は大業に学べ」というスローガンまでできている大業の或る展示会場に、「三不要」という標語がかかげられていた。



墓（烈志陵園内）

- 1 国家から補助金を受けとらない。
- 2 国家から補助食糧を受けとらない。
- 3 国家から補助物資を受けとらない。

要するに、何も国家の援助を受けず、自力更生でやる

というのである。そして、この大業は、全部自力でやって、模範的な農村となったのである。勿論そのために、朝早くから夜遅くまで、村の人びとは、力の限り働き続けた。天災に遇い、不作に苦しみ、あらゆる苦難と戦った、今日の勝利を、自分の力で勝ち取ったのである。

働くことの尊とさ、天地の恵みの有難さを、身を以て味わったわけであ

る。

る。かつては小作人として、奴隷のような生活を強いられた人が、自分らの田畠を、自分の力で耕し、そこに生き甲斐ある生活を営むことが、どれほどに有難く尊いことかを、身を以て味わったのである。

こうした中国の人びとが、躍動していることは、無理からぬことである。彼等は自から、開発途上国であるといっている。四千年の歴史を持ちながら、彼等はそう言い聞かせながら働いている。確かに文化的にはまだまだと見られる中国の人びとが、自身でそのように認めて努力している姿は、誠に尊いことである。そして、そうした中国は、将来、大国として世界に君臨するに違いない。

二、お経を読む革命委員

北京の中国料理店で、われわれ訪中団の歓迎会が行われた。席上、革命委員会の副主任と私は同席した。団長が私を紹介して、仏教系大学である大正大学の教授であることを言った時、その副主任は手をさしのべ、

「私も、かつて駒沢大学に籍を置いていたことがあります。般若心経も知っていますよ」

と、「観自在菩薩、……」と合掌しながら、お経を始めたのに、私は驚かされた。私達の一行は、教育視察団であったため、主として各種の学校を訪問した。従って、寺院は一つも訪問する機会が無かった。それだけに、こうした所で、お経を聞くとは、夢にも思っていなかった。私は驚きと共に、「乾杯」といって、相手に盃を捧げた。

中国では、現在信教は自由である。そして現に、趙撲初居士が会長をしている中国仏教協会が厳然として存在している。趙撲初居士はすでに戦前から有名な仏教信者で、私の師匠である林彦明僧正が、浄土宗開教総監として、中国に居られた頃から、活躍していた人である。現在、政府の要人としても活躍している。そして、毎年、仏教訪中団が数度にわたって中国に渡っている。来年四月には、中国から、日本に仏教訪日団が来る筈である。

そうした事からして、革命委員会の副主任が、お経を

あげたからと言って、何も驚くことはない。ただしかし、この人は、たまたま駒沢大学に籍を置いていたの



寺の跡（鄭州）

で、お経を知っているのであろう。彼が今日、仏教読者であるか否かは、失礼にあたるので、特に質問もしなかったが、一般的な状況から判断して、たまたまお経を知っていたに過ぎないということであらう。

中国の殆んどの民衆は、現在、宗教とは無縁な生活を送っている。それは、マルクス、レーニン主義でかためられた共産国として、当然なことである。そして、仏教に関して言えば、極めて限られた名利は残され、幾人かの僧侶がいることは確かであるが、こうした人びとが、果して将来とも居続けるかどうかということは、疑問である。現に、若い後継者は皆無と言ってよい。中国仏教の名利は残るとしても、これを護持する僧侶や信者が、どれ程に残り続けるかは、新生中国にとっては、未知の将来なのである。

三、民衆と宗教

私は街の所々に寺らしい建物のあるのを見た。勿論それは、今日寺ではない。集会所か何かの倉庫になっているようである。かつては、どの町や村にも、寺や、道観

があつたと聞いているが、今は跡形もない。そして、僅かにその形骸が、時々見られる程度である。人民公社のある村では、かつての土の家は無くなり、そこに新しいレンガ造りのアパートができていた。いかにも、新生中国らしい変化である。

しかし、所によつては、これからの人の教育の爲、一、二軒の土造りの昔の家が残されていた。近づいてみると、玄関の柱になるところに、仏龕らしいものが残っていた。多分ここには、昔、小仏が祀られていたのであらう。過去の残骸が、むなしく跡を止めていたに過ぎない。幾軒かの農家も見学した。極めて質素な一部屋であるが、アパートの一室であつた。そこには、毛沢東や、華国鋒首席の肖像は飾られていたが、勿論、仏壇や神棚らしいものはなかった。

今や、中国の民家にとっては、宗教は無縁のものとなつてゐるのである。そして、それに替るものとして、毛・華両首席が、すべての生活の支えとなつてゐる。肖像が、何処でも飾られていることは、そうした変化をそこに見ることができる。そして、とも角、現在の生活を向上し、充実するために、全力が払われている。

「生きてゐる人間が幸福になる事が、第一要件です」

こう主張する民衆の声は、人間は死んでしまえばそれで終りであるということのようである。死後の事を心配する前に、この現実をよくせねばならない。そのように、彼等は強調する。九億の人口をかかえた中国は、今必ずしも生活が充実しているとは言えない。又、第三世界の指導者となるためにも、経済の充実を計らねばならない。総ては、現実生活の中に向けられている。又、そのイデオロギーからしても、科学の絶対性を主張するのであるから、そこには宗教の入り込む余地が無い。又、入り込む事を拒否している。

若い人びとの中には、簡単に、「宗教は迷信です」と断定するものもある。しかし、人が死ねば、すべて物質と化すると単純に考へてゐるのではないであらう。死者に対して黙祷を捧げ、烈志の霊を丁重に葬り祀つてゐることは、やはり其処に、霊的なものの存在とまでいかなくとも、何か心情的に物と割り切れぬものがあるに違いない。

「信教の自由が認められている以上、彼等がどのように考えようと、自由である。四人組追放以後の中国は、大



昔の民家の跡（大寨）

きく変りつつある。こうした変化が、すぐに、宗教の面にまで及んでくるとは考え難いが、未だ新生中国は、三十年の歴史を歩んできたばかりである。そして、多くの課題が、これからいろいろの曲折を経ながら、解決されていく事であろう。四千年の輝かしい歴史を持つ中国は、それなりの地力を持っている。私は、その地力がどのようにに發揮されるかを、楽しみにみていきたい。

「浄土」教化トラクト

『浄土宝暦』

B6判・表紙共四十ページ

定価一部四十八円

送料実費

◎檀信徒の皆様への新年のご挨拶等に恰好の施本となります。どうぞ広くご利用下さいますよう宜しくご注文をお願い申し上げます。

発行 法然上人鑽仰会



吉田健一さんの思い出

しら はた けん ゆう
白 幡 憲 佑

(総本山知恩院副執事長
横浜・久保山光明寺住職)

八月三日夜七時、家人が取次いだ電話で吉田さんの死を知らされた。信子夫人は「方丈さんと河上徹太郎さんと雛さん（辻留若主人、辻義一氏）の三人にとりあえずお知らせしました。京都へお出かけでなくてよかった。健一が喜びます」電話の声は疲れきったものであった。もっとも夫人の声から淋しさを推しはかる余裕など一瞬の私にはなかった。ポカーンとした空虚さ、自分の身内に大きな穴があいていった。

たしか七月二・三日頃だった。約一カ月ぶりにヨーロッパから帰国した吉田夫妻から電話を頂いた。その電話は夫人からで健一さんの体調の悪いことを知らされ、お医者さんの紹介を頼まれた。早速に横浜市大病院の畏友沢木教授を介して東大病院を紹介したのだ。その時には既に他へ入院したとのことであった。十日余りの入院生活で帰宅したそうだが、「どんなに立派な病院でも病気はなおせるが病人は全快できないよ。僕は病人なんだ」吉田さんらしい表現を残して退院してしまったことを通夜の席で夫人は洩した。

吉田健一さんと私との交流は吉田家が私の寺の開基でもあり檀家としての結びつきがあったのだ



大磯・吉田邸にて

が、吉田茂氏の首相時代はあまり深い交際はなかった。吉田茂氏の逝去の時に大磯で初めて健一さんとお会いしたのだが、それ迄にも著書や伝説的な逸話は知っていた。

国葬後の或る日、吉田夫妻が横浜の寺を訪れてきた。遺族の殆んどがカトリック信者であった事から密葬はカトリックで執行したのだが、吉田さんは「私達夫妻は浄土宗です。遺族の事情からカトリックで密葬を行うことを話したとき、御住職が、教義的な問題なら別だが葬儀の事で私はとやかくは云いませんと云った言葉が私には驚きと共にうれしかった。親父も浄土宗の法名を希んでいるのですよ。私は吉田家の長男を廃嫡されてはいませんからね」とケツケツと笑われた。

吉田茂氏の法名を授与してからは青山墓地の吉田茂の墓碑もお坊さんに書いてもらいたいの希望で小林大巖師にお願いした。それ以来、一周忌もすべての年回法要は私がつとめる事になったのだが、それよりも人間的な交流の方が一層と深まっていたのである。

吉田健一さんは本当の贅沢が身についた人だった。もっとも、それ程の大金持ちではなかったろうが上等のものを愛した人だった。

度々お宅で御馳走になったりしたが、いつも最高の接待や雰囲気をつくりだしてくれた人であった。必らず濃紺の背広にネクタイをしめて迎え、辻留の料理が雛さんの手でだされ、シェリー酒を

食前に懷石の美味は菊正でひきたたせ、食後はブランデーで談笑するのがおきまりだった。

万国博が開かれた年だった。かねてから私の旧友の徳川恒孝さんと一緒に飲みましようとの約束があったのだが、万博のためにチャールズ王子が来日し日英協会主催の歓迎会の席上で二人は痛飲したのを相前後して知らされ、再会を約束したとの事なので、それでは知恩院の御忌法要でお会いしたらと吉田さんを参詣に誘った。徳川さんは急用が出来て入洛しなかったが吉田さんはお詣りしてくれた。ハニカンだ笑顔、真四角にきちんと座って法要に随喜してくれた。吉田さんは何処でも説経中は膝をくずすことはなかった。

この時は万博へもいく予定であり、京都に三泊ぐらいしたと記憶している。仕事のない時の吉田さんは実によく飲んだ。飲むというよりも親しい友人との時間を大切に愛していると表現すべきかもしれない。

「小林さんと鶴銅さん（知恩院執事長）にあげた酒はなんですか」と質ねると、「あれは上等の白葡萄酒です。親父がフランス大使から貰った残りですがね。そうだ、あれを飲みましよう」と云って酒場に同種類の物があるかと質ねられた。九階の食堂にあるとのこと、私達は又々その酒を求めてエレベーターに乗ったのだ。「今日は私が主人役ですよ」と云って下座に吉田さんは着くと早速に白葡萄酒を注文し、おつまみの調理法まで指示して京洛の夕影を愉しんだ。そろそろ酒も底に余すのみの頃、ふっと見ると高松宮御夫妻が御いになった。宮様は特徴のある物怖じしない吉田さんの笑声に気付かれ、後から背中をおさえて、「健一さん暫らく」と声をかけられた。エツとふりむいた吉田さんはすずやく長身を正して、「これは両殿下、暫らくでございます」と背を屈めた姿には悪童がイタズラを見とがめられたような可笑しさがあったが、そこには、もはや酩酊の笑声はなかった。吉田さんのきまじめな性格があらわれていた。

こんなこともあった。

吉田茂氏の七回忌法要のあと東京のホテルで追悼会が開かれた。土光敏夫氏の追悼の言葉が述べられている時、おくれて当時の首相田中角栄氏が来会した。秘書が遺影の横に立つ吉田さんに総理大臣の到着を知らせにいった。私は吉田さんの反応を興味深くみつめたが、吉田さんは軽く会釈しただけでその場を動かさず土光氏の言葉に聴きいった。やがて追悼の言葉が終ると田中氏にはじめて来会の御礼を述べる吉田さんに、気骨ある面目を感じたのだった。時の首相が姿を現わせば主人役はなににおいても飛んで出迎えるシーンが眼にうかぶのだが――、来会者すべての人々に平等の敬意と感謝をもつ吉田さんの紳士道であった。それは又、権力に阿諛することを嫌悪し、父が宰相時代も意識して大磯と疎遠にしたあの人らしい風格でもあった。

吉田さんほど友人を大切にする人も少ないと思う。文壇の先輩達からは「健坊」と愛され、自分より若い人達とも対等に交き合ってくれた。横浜では吉田夫妻、藤木幸夫夫妻（私の親友藤木企業KK社長、辻義一夫妻と私共とで中国料理を会食したのが最後であった。吉田さんの食べもの随筆は定評があったが、こんな席でも食べものの博識ぶりは専門家の雛さんはじめ私達を美味天国へと誘ってくれたものだった。

その随筆「私の食物誌」は有名だが、あの日二人で南京町を歩いたとき私のいきつけの店で点心を求めお土産とした。その点心を読売紙に連載中の「私の食物誌」にとりあげてくれたが、吉田さんは決してその店の名前を紹介しなかった。「店の名前を書くとは日本では繁昌するかわりに必らず不味くなる」と嘆いたりもした。

吉田さんは本を出すといつも署名をして私に贈ってくれた。約二十冊ぐらいいは戴いたと思う。文学には素人の私なので読後感をたずねると云った失礼なことは一度もしなかったが、素人なりの感想を

私が語れば例の笑声でこたえてくれたのである。

吉田さんは御承知の通り英国育ちの紳士であった。その話す英語はドナルド・キーン氏によれば現在の若い英国人であれほど美しい英語を話せる人を知らないという程であり、音楽家の佐藤美子氏と会えば王朝風の格調高いフランス語を喋ったとの事だが、外国生活もろくに知らない私にはどんなに酔っても日本語しか喋らなかつた。英語の単語ひとつ出てこない日本語を話す吉田さんは言葉を本当に大切にした文士だったのである。

吉田さんとの時間は何を語り合ったのかさだかに思い出せない。若い頃には仏教美術に興味を持ったり豊富な話題につつまれていたのだ。吉田さんは何時こんなにも勉強するのかなと不思議に思つた事もあつた。だが執筆する時、勉強する時は何日でも絶対に飲まなかつた。それだけに飲める時は徹底したのである。

今夏の北軽井沢の吉田山荘は扉を開ざされたまま晩秋をむかえたことだろう、数年前に家族一同と招かれたが数千坪の原生林の庭に建てられた栗の木造りの山荘。ベランダに数個の人参、玉葱、ジャガ芋が置れている。ベランダに腐つた個所があるなどという野暮な事を云わずに野菜をいたんだ個所の目印に置くなど、何んとも心憎い、粋きなばかりいをする吉田さん。この春には「ベランダも新しくなりましたよ」とお招きをうけていたのだが――。

「自分の書きたいと思つていたことはみんな書いてしまった。あとは余生だ」と云つた吉田さんが、成熟の時期に忽然と逝つてしまつた。淋しい、右手に盃を持ちいつ迄も卓上に置かずに飲みつづけるその酒品のように句読点のない誰にも真似られない文体の本ももう贈られてこない。

間もなく百か日忌を迎える。淋しさと共に惜しまれてならない。

文瑛院涼誉健雅信樂居士 合掌

いのちを考える

(八)

— 労
働 —

青年の勤労観について



森 もり

宗 そう
平 へい

(淑徳大学教授)

○

昨年度のが国の人口統計によれば、いわゆる、戦争を知らない年令層である34歳以下が、総人口の約半数以上(五七%)を占めたことを示している。そして、55歳以上の年令層については、昭和47年度から昭和51年度にわたって年々急ピッチに上昇カーブを描いてい

る。これらの数値は、明治・大正は遠く離れたという実感を深くするとともに、来たるべき高令化社会の諸問題に対処する解決のための青写真の作成と十分な検討がわれわれ国民にとっての急務であることを痛感せずにはいられない。

さて、最近興味深く読んだものの中で、月刊紙「思想」(岩波書店)における日高六郎

氏の日本文化論に関する短文がある。その中で、日高氏は、十年ひと昔という世代区分があるが、現代史的にものが見えてくるには三十年を一代代として区分した場合であるとしている。もちろん、この世代区分の起点をどの時代に定めるかが問題であると述べられている。

○

ところで、われわれはよく世代の断絶とか、いまの若い者の考えは不可解であるとか、年寄りには若い者のすることに口をはさまない方がよいとか、価値観が違うのだとか、世代間のギャップを表現する言葉を耳にする。こうした世代間のギャップを如実に示すものとして、戦後生れの青年層と戦前生れの50歳以上の年令層に現われる「勤労観」というか労働に対する意識や態度の差異をあげるることができる。戦前に代表される勤労観の一般的表現は、「勤勉実直」であり、この生活

態度がまた人生観の中心であったといえよう。昼夜をたがわず勤勉に励むことが美德であり、その実践が人生そのものであるという価値体系があった。そして、この価値体系が社会人の、また社会生活のバック・ボーンとして存在していたわけである。生活様式の面でも娯楽や余暇を求める生活態度は、社会的にも肯定される評価ではなかった。現代が余暇時代といわれ積極的な余暇行動が追求されることとはかなりの隔りがある。そして、戦前の勤勉実直への価値志向は、青年層のうちでとくに旧制高校や中学生にみられた質実剛健の精神の涵養という教育目的が敝衣破帽といふかなり屈折した行動様式を一方では形成したといえよう。しかし、戦後の復興、高度経済成長を支えてきた価値体系が「勤勉実直」であったことは否定できない。

一昨年、総理府青少年対策本部が中心となつて行った世界十一カ国の青年意識調査にもついで、「勤労観」を紹介しながら若干の

私見を述べてみよう。まず、調査項目から勤労に関するものを三項目とりあげてみよう。

(1)「勤労の目的」については、当然のことであるが六割弱が「収入を得るため」であると答えている。ついで三割強が「仕事を通じて自分を生かす」としている。そして、「社会人としての義務を果す」は一割弱である。アメリカの青年層との比較ではほとんど差がない。

(2) ついで、「職業生活」に関する質問のうちで興味のあるものを二つだけピックアップしてみよう。

(i)「職場では自分の自由があまりなく機械の一部のようになっていく」という質問に対しては、日本の青年層は約三人に一人の割合で一種の疎外感をもっていることがわかる。この日本の青年

層が示した数値は、日本よりもはるかに工業化、合理化が進展していると思われるアメリカの青年層と比較した場合でも約二倍強であり、日本の青年層の職場への不満が高率であることと合せて考えると日本の青年層の特質であるといえよう。

(ii)「将来、得られるポストも収入も決まっています、はいあいがない」についての回答を見ると、日本の青年層では、いわゆる、「しらけきった青年」が三人に一人の割合でいる。アメリカでは日本よりもはるかに多く二人に一人がそうした感じを抱いている。このことは、日本よりもより管理社会が確立されており、また、資格社会における階級統制が各業種に徹底していることを物語る数値ではなからうか。

(3) さいごに、「職場生活」に対するト

タルな満足度について比較してみると、日本の青年層は、アメリカ、イギリス、フランス、西ドイツ、その他六カ国の中でもっとも満足度は低く、十一カ国の平均八〇・三%をはるかに下回る五九・五%という結果を示している。言い換えれば日本の青年層は「職場生活」に不満をもっていることであり、驚くべき特質であるといえよう。

さて、こうしてみると、日本の青年の勤労への意識や姿勢は国際比較からみて、決して前向きであるとは言えないようである。しかし、こうした勤労観は、人生観や社会観さらには人間観などに支えられているわけであるから、青年の意識や態度をトータルに理解した上で分析され意味づける必要がある。したがって、ここに、日本青年の意識の特異性について松原治郎氏の解釈を参考にしながら

ら要約しておこう。

以下に掲げる各項目の割合は高い数値を示しているものもあるが、それらは、いずれも日本青年の特質としてあげられるものであることを留意されたい。なお、平均とは十一カ国の国際平均である。「心を打ちあけて話せる友人がいるかどうか」：いない二三・〇%、平均一二・二%、「人生は愛する喜び、愛される喜びを得るためにある」：肯定七七・一%、平均八六・七%、「互いに察し合い、いたわる人間関係がよい」：肯定八八・二%、平均九四・〇%、「人生の目標は愛と誠実に生きること」：第一にあげた割合三五・八%、平均四八・三%、「道に迷っている人があったときにあなたはどうしますか」：声をかける三一・九%、平均三九・四%、「人間の本性は悪である」：肯定三三・〇%、平均二〇・八%であり、いずれも平均を下回るものである。さいごに、「信仰に関心がない」七四・〇%、平均二三・二%であり、関心のある

もののうちで約一二％が仏教であり、他の宗教へは一％～四％程度を占めている。他の諸外国との比較では、ずば抜けて無関心の割合が高い。こうした信仰に関する結果をみるとき日本の宗教の重層性という視点からの分析も考えられるが、最近の青年の政治行動などを通して考えることは、些か極論めくが、政治的イデオロギーが信念のレベルから信仰のレベルに近い心理的領域に定着しているのではないかと思われてならない。それは、体制変革だけが絶対的に理想社会を作るのだという短絡的な心情とその方法論としての社会科学に対する教条的な絶対視などがそれにあたるのではないだろうか。信仰への無関心層の中にはこうした青年がかなり含まれていると思えてならない。

○

日本の青年は、「家庭生活」「友人生活」については国際的には大差がないが、「学校生

活」「職場生活」「社会・国家」に対する満足度が低いという結果になっている。そして日本青年の意識と行動の枠組の特質は、「人間不信」と「不安」にあるという結論に達している。人間相互の信頼と安心を得るために宗教の果す使命が今日ほど必要とされていることを、この調査からも十分に察せられる。

また、今年九月に東京都から発刊された「大都市青少年の生活・価値観に関する調査」によれば、トータルにみて、青少年はいわれるほどに虚無的でも革新でもないこと、そして、その生き方は潜在的には外へと積極的に志向しており、将来展望は前向きであって自己閉塞的でないという報告がなされている。

今日、一般的に言われるように価値の多様化は、情報化、流動化と相即的に進行している。こうした現代の状況の中で、青年は自己をつなぎとめ、自己が一体化できる対象を求めさまよい、またそれ故に創造する。この情熱とエネルギーは、戦中戦前に青年期を過し

た人々に共通する暗い社会的圧力のもつイメージに覆れることはない。青年はいつの時代でも知的にも、精神的にも、物質的にも飢えた存在であることには変りはないし、また、青年期が「まどい時代」である点も同じで

パート・タイマー哀話

子どもたちが巣立ったあとの虚脱感におそわれたある母親を、身近な例で知らされてからというもの、なにかシラけた気分でもが身を願りみるようになった。若い人とのちょっとした対話でもわかる感覚のズレ、時代とりのこされていく不安。四六時中家内安全を心掛けてコマ鼠のごとく動きまわるうちに、

ある。今日の日本青年のもつ、人間不信や不安感、さらには勤労観についても、それらはいずれもいわゆる大人社会の投影であることは否定出来ない事実である。



佐野敦子

(家庭主婦)

井のなかの蛙よろしく社会性を失っていく。あまつさえ、主人や主人の会社を鼻にかけ、いつしか比例痴呆症におちついているのかも……。いま手にしている幸福とは主婦の座にあることで得られる安易な満足感ではなからうか。この辺で自主独立の精神をうちたてないと、私も彼女と同じ立場になる……。

さりとて自分に対して積極的な姿勢をとるうともせず、ただ愚痴っぽい心情で日を送っていた時期に、たまたま外に出て働く話があった。縁者の一人が事業をはじめにあたって、しばらく来てくれないかという。家族の意見は賛否相なかば、私自身も日頃の持論からすれば渡りに舟といえそうだが、思案のあげく断るわけにもいかないと、務めにでた。パート・タイマー。語感からいうと淋しい職種だ。だが親戚のことだし、仕事といっても家庭婦人にこなせる留守番役程度、これでも若干なりとも給料が入るとはありがたい。緊張しながらも気楽な職場だけに、どうやら滑りだしは順調のようであった。ところで職場のある事務所は小さなビルの一室で、ビルといってもいまだき珍しいほど古くて汚い建物に零細企業が五・六店ずつ各階に雑居していた。狭い階段を昇って二階の奥なのだが、流し場とお手洗いは共同、ここでは清潔とか整頓とかは無縁の様子である。一週間ほどたっ

て気づいたが、掃除をしないかららしい。ビルのおばさんが来なくなってしまうて以来だそう。流し台の前に立つと異臭がするし、お手洗いは隣のビルへ行きたい気持だ。流しの下をみるとお茶殻のつまったバケツがぼろぼろである。素知らぬ振りをしてゴミ集めの日に捨てると、それからはいやな臭いも消えた。新参者なのだからと遠慮しいしい流しを磨いたが、わが家の湯殿を掃除するのとは気分がちがう。第一、馬鹿々々しいことだ。ビルの清掃係でもあるまいに。

たまにかねてある日、手洗いの掃除を始めた。私が家をあげるようになってから、ときどき母にかわってもらう仕事なので、みょうな後ろめたさを感じる。呼吸をこらえるようにしながら掃除をしているところへ、かどの事務所の女の子がきた。ハツとした表情をかくすようにうつむいていってしまう。ふだんは快活で、茶器を洗うときに顔をあわせる、情報魔よろしく話しかけてくるのに。

「きれいになりましたネ、おばさん」

通りがかりの男性が声をかけてくれる。たしかにおばさんの仕事にちがいない。

二、三回、それもかくれるように掃除をしたり、いつのまにかまた溜りだしたお茶殻をすてたりしているうちに、ある空気を察するようになった。大声で礼をいうのは男性で、横をむいて見ぬ振りをするのは女性のことだ。それが何故かもわかる。男性はこのことについてはまったく関係がない。しかし女性はわが身にふりかかってくる問題なのだ。心に責めを感じても、手をつけたくない仕事だ。四、五人たむろをして何かを話している、私を見掛けるとさっと散っていくあの冷い空気……。余計なことをする女と完全にきらわれたようである。アルバイト先まできて掃除するのは家庭の主婦の働きぐせで、一種のいやらしさかもしれない。けつして恩にきせるつもりもなし、すけてほしいと頼んだこともないのだが、自分の行動の甘さ

に嫌気がさす。レッテル通り「世間知らず」といえよう。

それではと方針をかえて我慢することにした。仏教には「不浄観」という行があるとか。それに仕事の内容もわかりかけてきて、事務も忙しくなりだした。家庭の雑事もどこおりがちなので、体力をそちらへむけよう。つまらない反感をかうよりはと自分を制する。よごれがひどくなれば誰かがやるだろう。掃除当番でもきめてもらいたいものだ。が三週間もすると、もう堪えきれなくなり、肩身の狭い思いをしながらまた掃除を始める私だった。「不浄観」などと大それたブラカードを心にかけたものの、早速それを取りはずして、主婦向きの手軽な「きれいずき」におきかえてしまう。その方がはるかにわが身にふさわしい。

そろそろ一年近かったころ、ビルの取りこわしの話がつたわってきた。

「商売も軌道にのってきたし、チャンスだ

な。新しい事務所へ移ればアツちゃんに掃除の苦勞までさせないですむ」

上司にあたる縁者のそれとないたわりが胸にしみた。ありがたい。それよりもなによりもこのビルと別れられるのがありがたい。しかしこの話を耳にするまえから、そろそろ時機をみて家庭へもどろうと私は考えていたのである。というのは、よく晴れた日曜日に、日のおいのする布団をとりこんでいると、それに手を貸してくれた主人の口から、

「お前がうちにいて、こうやって布団を乾してくれとなあー」

と感謝とも嘆きともつかない一言が洩れたせいだ。やっぱりそうだったのか！ 自分では家庭にウエイトをおいて、いわば悪い勤務ぶりであった筈だが、そうなるとどちらも失格というわけだ。母もつかれた風だし、子どもたちの話しかたにもうるおいがかけてきたように思えた。

かくして、私のアルバイトは終わった。失敗であったというよりは、主婦であるからこそ得られる幸福がやっとわかっただけでもまずまずのようである。といって自主独立の夢をすてたわけではない。ややニューアンスをかえて自主性確立を目標にというのか。これからは家にいながらも参加できるボランティア活動か、あるいは点字の仕事でもおぼえてみたい。奉仕の仕事がなまやさしいことではないのも、今度の体験でわかった。思いつきの善意ではたちうちできず、愛情と信仰の力強い裏づけがあつてこそ奉仕活動も成りたつていくのではなからうか。

『人生で一番楽しく立派なことは、生涯を貫く仕事をもつことです』

福翁遺訓の第一のこの言葉がこれほど重く、かつ羨しく感ぜられようとは！ あわれなるパート・タイマーのささやかな得点といえ、自分の限界を知ったことだけである。

働くということ

「日本人はいつたい何のために働いているんだらう」

これは私の米国の友人が不思議そうな顔をして訊いた言葉である。彼から見た日本人は、働くことが人生のすべてであって、生活を楽しむということがないように見えるらしい。日本人をエコノミックアニマルだという西洋人にありがちな日本人観察である。

たしかに一見ではよく働いているように見える。(働らかされているといいかえた方がよいかも知れぬ)。しかし、日本人とはそれほどよく働く民族であろうか。私にはどうしてもそうは思えない。いや、むしろ西洋人の方がよく働いているとさえ思えてしまう。それは、われわれ日本人の働き方がどこなく消極的で、そしてルーズに見えてならないからだ。ただ何となく無目的に仕事をしているように見えてしまう。これを

しなければ食っていけないからしている、といった感じである。これは私が二年間ほど西洋人の中で仕事をしたからかもしれないが。

このように「働く」ということに対する私たちの姿勢こそが、実はもつとも大切なことなのである。それは古来の名言にもみられることである。——生きるとは呼吸をするにあらざる、何事をか為すことなり(ルソー)。——ただ働かなくちゃいけない。生きてゆくことの幸福も、意味もみなその中に含まれている(チエーホフ)……。この二つの言葉が示すように、「働く」ということは「生きる」ということである。だから中途半端に適当に働くということとは、中途半端に適当に生きるということになってしまう。つまり自分で自分の人生をつまらなくするのにしてしまうことになる。こういうところに現代人の悩みがあるのではないだろうか。何か空しい毎日、仕事もつまらない。そうかといって遊んでいてもつまらない。人と人との付き合いも、何かさこちなく表面的である。心の底から満足はいくよくなことが何もない。と思つて暮している

人が以外と多い。私は現在の娯楽施設の盛況を見るにつけ、このような人々が自分の心の空虚さから一時でも自分を忘れようとしているのではないかと思えてしかたがない。何をしようという目的もなく、繁華街をぶらつき、目に付いたおもしろそうなものに飛びついていく。一時は自分を忘れられ、おもしろいかも知れぬ。しかし、それには自分の心を満たしてくれる何ものもないのである。そしてまた、彼らはそういうことを十分に心得てもいるのだ。

一生懸命ということを嫌いがちになっている今日である。先を見してしまうのも決して悪いことではないが、今というこの時々をつみかさねて生きていかねばいけないわれわれの人生である。今をどうでもいいように生きてしまうということは、自分の人生を、そして自分の命を無駄に粗末にしてしまうことにはならないだろうか。一生懸命に働き、遊びもまた思いっきりなくてはいいけない。それが自分の人生を幸福にし、意味あるものにしてくれるのだ。

私は、この「一生懸命」という言葉を大切にしながら働いていきたいと思う。(西木田)

こころの師



(一)

私の家は薬局をやっていましたが、家の向いに本屋がありました。父親は漢方薬に割合興味を持ち、私も中学生の頃は比較的科学に関心があり、向いの本屋ではよく立ち読みなどしました。ある時、「科学朝日」という雑誌をめくっていると、ちょうど七十歳ぐらいのやさしい老人の写真が載っていました。「牧野富太郎」と名前が書いてありました。それは、私がよく使う植物図鑑

津田

だ

ひろし

(ヒマラヤ美術館長)

を書いた先生の名前です。といいますのも、私の父親の叔父は僧職にありましたが、父親に連れられてそのお寺に私が行くと、牧野先生のご本を手にながら、庭に咲く花々を見て、これが「しようじょうばかま」、これが「ふでりんどう」などと教えてくれたものでした。私は子供ながらに、押し葉とか押し花などをやっていました。そんな時に牧野先生のお写真を見、また学界でも不遇であった先生を朝日新聞が取り上げて、「朝日賞」を受賞された頃でした。牧野先生はこれによって世間に出ら

れたわけでしたが、先生は元來が高知県の酒屋の息子さんで、お婆さんの手で育てられ、そして寺小屋で勉強し、やがて志を立てて東京へ出られたのでした。牧野先生がその後大いに努力されて、最後には天皇陛下にご進講までなされるようになったのはあまりにも有名です。

この牧野先生の図鑑を読んでいるうちに、私の集めた一つ一つの標本の判定に疑問を持つようになったのです。私は矢も楯もたまず、父親に頼んで、三百種類もの標本を小包みで送ったりまた背中に背負ったりして、東京練馬区の大泉学園の先生のお宅を尋ねたのです。そうして門を叩いた私を先生はやさしく迎えて下さり、中学二年の頃、私は自称「先生の弟子」となったのでした。先生は、私の標本を何か宝石でも見るかのように丁寧に見て下さいました。そして、それらの一つ一つを取り丁寧に教えさとして下さったことも忘れたい印象です。薬草、つまり漢方の方の植物などを持って行きますと、時には不明のこともあり、書庫の中で調べられる先生を、三十分以上もお待ちしたこともありました。そして、どうしても不明の時は、「後日、君に調べて送るよ」と申され、その通り丁寧なお便りが届いたものでした。

このような先生の姿勢に対して、その後の私の生き方が充分に報いられたかどうかは疑問です。牧野先生のお便りは、よく「名古屋市、中村区、太閤通り、……」という風に、小さな点が住所の一区切りにそれぞれ付けられてありました。ある時そのことをお尋ねしますと、「その方が郵便屋さんが読みやすいだろう」ということでした。達筆の中にも、住所書きにそこまで配慮されるような、心の暖かい世界に一步踏み込んでおられる先生のお人なりを、草花を扱うお姿や、それらを見つめるお心などを通して、深く教えられたことでした。

私はその後、牧野先生のご紹介で、東北帝大で教鞭を取られていた柳の木の研究で有名な木村有香先生の教えも受けることになりましたが、昭和三十二年の頃でしたか、牧野先生のお宅はその頃は堀立小屋のようなものでしたが、先生の家の前の約七百坪程の空き地に、東京都が「牧野植物遊園地」というものを作ろうということになったのです。しかし、先生の集められた標本と植物の類いを納められた先生のお部屋が、どうしても取りこわされそうになったのです。私はその報道をテレビで見まして、「これこそ宝だ！」と思い、その当時は国立図書

館におられ、後には人事院総裁となられた佐藤達雄さんと一緒に、東京都に先生のお部屋保存を申し出たのです。佐藤先生も、私と同じように中学三年の頃から、牧野先生にご指導を受けておられたのです。こうして牧野先生の昔のままのお部屋を鉄筋コンクリート造りで、今に伝えることができたのです。

(二)

私は本来でしたら、植物採集に今でも野山を駆けめぐっていたはずなのですが、あの今次大戦の敗戦という大転換の中で、私の鋒先きを変えたわけでした。ちょうど敗戦の年の八月二十日でしたか、当時岐阜大学の学長をしておられた吉井義次先生に——この先生は日本における植物形態学の最初の權威でしたが——、私たち五人の学生は、「戦争に負けた。今まで戦地に行っていた人たちも帰って来るが、君たちも社会に出て新しい日本を建設しなさい」とさとされたのでした。私はこの吉井先生の訓話に基づいて、敗戦の焦煙のいまだ残っている荒れはてた街に飛びだしたのでした。

しかし、はたして何をしたらよいのか、ということ

大いに悩んだわけでした。算盤も下手だし、所詮書生商売となってしまう。しかしながらそんな中で、何かを作り出す仕事をやって行きたいと思いました。そこで一、二の考えはあったのですが、物資も不足し、心もすさみ切った人たちにたとえお菓子一つでも食べていたのだら、というようなことを思っていた矢先、それは昭和二十四年頃でしたか、小麦粉と砂糖と卵子の統制がとけたのです。それで名古屋にはえぬきの洋菓子屋さんがなかったこともあり、一人の技術者との出会いからお菓子作りをはじめたわけです。今年で約三十年目ということにもなるわけです。

最初は、その日の生活に追われ、明日の希望に幻想を抱いて送る毎日でした。十数人の職人と一緒に十年間は無我夢中で頑張ってきましたが、ある時思うには、何一つ身についていない、明日への手掛かりが何もない、というような状態でした。それは技術的にも、利益の面においても……。そんな時に、あるお菓子の雑誌の中に、新潟県の長岡で商人の集いの講習があるということを知って、それに参加しようと思ったわけでした。しかし当時、二泊三日のこの研修の費用である五千円のお金がない

くて、一日遅れで参加したのでした。そして一生懸命お話し聴いたのですが、最初の講義の内容は実際に店舗を持っていない私には空論でありました。しかし翌朝の新保為八先生の「商人の心得」というお話が、一番前の席で聴いていた私の心を捉えたのです。「まことの商人は心の徳を売って、ものの徳を利益としなさい」ということでした。そしてそのお話し振りの熱心さは、机を小切さみに動かし、水差しの水を全部飲みほしてしまう程の熱気でした。「お客というのは自分が一番幸せになることを求めているんだ。お客の気持ちに一步踏み込んで、相手に役に立つかどうか、相手に信じてもらえるかどうか。儲けるといふのは「信者」と書くでしょう。信じてもらえる商人にならなさい。商売というのは商売というけれど、一步一步あきないでやって行くんですよ」と、こんなすばらしい言葉を聴いて、現在では名古屋市内に、私の好きなお菓子とコーヒの店を数多く出せるようにまでなりました。

(三)

毎日、朝早くから夕方まで、ケーキを作り、それを直

営店で売るのが私の日課ですが、私は小さい時から絵が好きで、植物の絵などはよく描きました。そんな私が、苦しい時代から少しずつ買い集めていた色々な絵を、皆さんに観賞していただいたり、勉強したりしてもらう場を作ろうと、まことに分不相応なプランを立てたのであります。牧野富太郎先生は独学で日本の「植物の父」といわれる程までになりましたが、先生は時々「牧野結網」という号を使われましたが、その訳を尋ねますと、「岸辺に寄りて魚を眺むるより、退きて網を結ばん」と申されました。実は私も、たいへん生意気な言葉なんです、が、「美の輝きに感動し、新しき文化をこの地に作らん」というような思いで、この「ヒマラヤ美術館」を造ったわけなんです。正直、心の中で思っていることはそんなことなんです。それはまた愛知県東海地方には、近代洋画美術館がないものですから、私なりに集めた美術品をこうして展示させていただくことになったのです。

こうしたことが、「ヒマラヤ美術館」を造った動機でしたが、ちょうど美術評論家の今泉篤男先生をお尋ねしたところ、「日本に著名な画家がたくさんおられるが、た

またま名古屋のご出身の方も何人かおられます。まず杉本謙吉先生、それから三岸節子先生だ」と、こんなことをいわれました。そして私は去年の十月頃、まず杉本先生のお宅を訪れました。そして私が十分間も説明しないうちに杉本先生は、「津田君、よく造った。僕そこで骨埋めるよ」と、喜んでこの「ヒマラヤ美術館」の運営にその作品を提供して下さいました。また三岸先生も同様でございました。三岸先生四十年の画業の中で、手元に残されていたもの約五十点を提供して下さいました。そして、これらを「杉本謙吉作品室」と「三岸節子作品室」として展示いたしております。

ところで、私は先般杉本先生に先生の師匠である岸田劉生先生とのことどもについてお聞きしました。「実は私の父親は浄瑠璃の三味線弾きで、友達が京都にいたので、その人の紹介で父親と私との三人で岸田先生のお宅をお邪魔したんです。しかし先生は、正座した私たちを前にただ静かに書きものなどをしておられるだけでした。父が「私、杉本の……」といいかけると、先生はただ「わかつてるよ」といわれただけでした。津田君、弟子入りとはこんなものだよ」と、杉本先生はやさしいお

顔で申されました。

今、若いお方が、「師匠」とか「先生」といわれる人と気楽に接しられますが、先生と明るく交わられることはとてもよいことでしょうか、尊敬するということになりますと、身体全体にひしひしと感ずる何ものかがあり、それを謙虚に全身をこめてじっと思いをこめて受け止める心が必要なのではないのでしょうか。ともかく私は、牧野富太郎先生をはじめとして、多くのすぐれた先生とめぐり合うことができました。こうして私は、「わがこころの師」と仰ぐこれらの先生方を、いつも思い起しております。

今回掲載させていただいた「こころの師」は、ヒマラヤ美術館の館長として、美術の振興とこころの世界に広く深い視野を抱こうと日頃より努力されている津田弘さんのお話です。津田さんは今年五十二歳、名古屋市内にご在住で、実際には洋菓子会社である「株式会社ヒマラヤ」の社長としても活躍されておられるのであります。このお話しは、十月六日（木）から八日（土）にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

道南の語り草

—有珠山噴火・室蘭満岡寺・覚道上人



いい じま えい とく
飯 島 英 徳

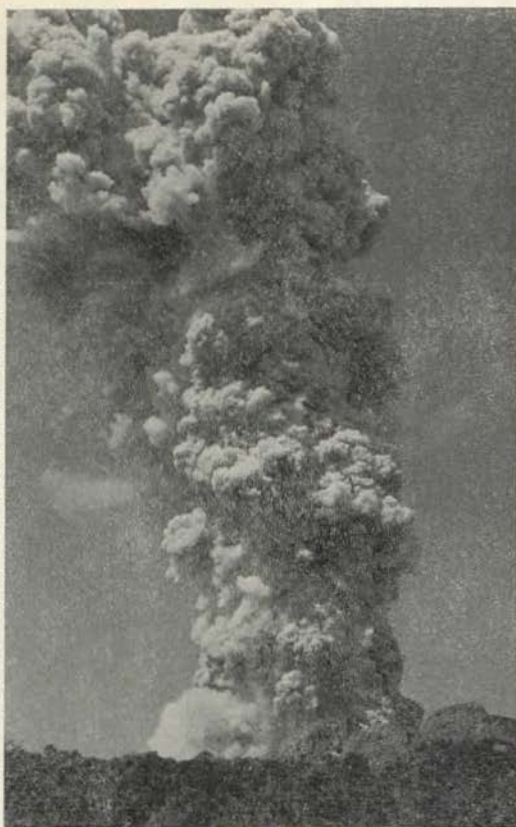
(室蘭市善行寺住職)

道南地方は、北海道の湘南と言われ、特に氣候が良
い。農産物の宝庫と言ってよい。

八月七日お盆の入り、棚経の最中、国立公園の洞爺湖
に近い有珠山が突如として噴火、恐ろしい勢いで黒煙を
上空に押し上げ、室蘭市内から見た遠眺は丁度、天空が
半分、明と暗とに分裂した感じだった。半分の空が雲一
つ無く太陽が輝き明るい快晴の光景であるのに対して、
片方の空は黒煙から生ずる暗雲、それらの摩擦で生ずる
雷鳴の響きで異様な光景が、僧衣をまとった身にひしひ
しと伝わってきた。翌八日、登別市に棚経に行くも、噴
火の黒煙と火山灰を直接かぶり強風をまじえて町の中は
満足に呼吸も出来ない砂塵の街と変り西部劇に見られる
荒廃した感にうたれた。檀家の女主人が語るには、真昼
の真っ暗闇の真夜中と言う表現の如く、急に家の中が真
っ暗になりカラスが鳴き出し電氣をつけてみたものの恐
怖感にかられて仕方がなかったと述べた。有珠には徳川
幕府のロシアの南下に対する宗教政策による蝦夷三官寺
の一つ、善光寺が存在するが文政五年の大噴火で寺の地
蔵堂が火山れきで埋もれ、寺を山越まで避難させた記録
があるだけに驚きは尚更強いものがある。今回も、中腹

にある奥之院が数々の仏鉢と共に大量の灰で滅亡すとの報道に、自然の猛威にただただ驚異するばかりである。現在も地殻変動や隆起を続け、地下のマグマが活発との事、かなり有珠山が変形するのは時間の問題である。

○



有珠山大噴火―昭和五十二年八月七日午前九時十二分

気候の比較的良好道南地方で室蘭だけは秋を除いて氣候が悪い。地形が帯状の山坂の多い異色の存在的な街で、その地名はアイヌ語から転じた「モロエラン」(静かに下る小路)がその語源である。道内では珍らしく積雪量が少なく雪無しの正月を迎える事が近年では多い。しかし周囲が海に囲まれているから冬の風は骨身に染みて

きつく辛く突き刺さる様だ。春彼岸が過ぎても寒く感じ、春の到来が遅く感じる。月遅れの五月の「花まつり」もどうかすると六月になる。六月は一番嫌な濃霧の季節で、当地方では「ガス」がかかると言って肌寒い日の連続で嫌になる。七月後半の「港まつり」から八月中旬の「八幡宮」のお祭までが夏の季節である。こののささやかな夏の短い期間中に、大小合わせて三十数回の祭が町単位であるのも珍らしいと思う。山と山との谷間に街が存在するのであるからまつる仏様、神様も各々異なる感じである。

室蘭文化の発祥寺院として有名な安祥院常照山満岡寺は文久二年の創立で、蝦夷三官寺としての有珠善光寺が徳川幕府の許可を得て道南一帯に十三ヶ寺を建立したが、その一ヶ寺を室蘭一早く文化の開けた「本室蘭」に説教所を設けたのが抑の始まりである。初代住職は増上寺山内常照院主職のちに護国殿黒本尊守護職になった満岡和尚で、自坊に祀ってあった背丈七十cmの「阿弥陀如来像」を肩に背負って室蘭入りしたのである。

明治初期の室蘭の状況を見ると諸藩、土族の支配から開拓使の直轄に変わった室蘭郡の戸数は和人八十一戸、原住民五十九戸、人口僅かに五百九十二人程度であったと記録されている。そのように初代住職が開拓布教に來た頃は人口もまばらでその教化活動に苦心された事であろう。ところが驚くことに、それ等の困難を克服して、四誓偈の「常放大血中、説法師子吼」にある如く布教伝道を実践している事である。市史に、それも正確に毎月三回、一日、十一、二十一日と一の日の付く日の午後二時から本堂に於いて説教を行い、大いに当時の室蘭の人々

に魂の安息を与えたのである。又、この当時、非常に興味があり面白い問題として説教所が開設されても、僧侶だけの、又、浄土宗一宗のみの説教所としてでなく、所謂、信仰の如何を問わず、仏教各宗派は勿論のこと、神道の教えまでも、ここで行われたと言うことであり、当時郡役所では僧侶、神職の別なく皆同じ対等に教導職に列し、説教開催の通達も直接、会所から行われ、休講の際には、その都度、標札に「休講」と掲示しておくと言う事で、その当時としては珍らしく規律正しいものであった。

満岡寺を語るとき、忘れてならない上人が第五世、飯嶋覺道大和尚（慶応二年、長野県に生誕）である。室蘭市は勿論のこと、広く増上寺、そして道内に響き渡った名僧で、明治三十四年、上人三十五歳の時、有珠善光寺住職に、大正八年、五十三歳の時、満岡寺住職に各々任命され、布教教化に専念されたのである。

昭和期に入り、上人の偉大な感化力は多くの人々に、明日への希望の光となって心に深く刻まれた。その頃の

上人の行跡で、最も多くの人々に印象深い事柄は、子供をだれかれの区別なく可愛がり、毎日月参りに檀家を廻り戴いた「御布施」を駄菓子屋の店先で開いて、それで全部、キャラメルとお菓子を買い道で泣いている子供等にも、檀家の子供達にも菓子を与え「布施の行」をつまめたのである。その頃、子供であつた人々も今では、相当の年配になつてゐるが、この小さな行為が今でも人々の間で語られ、上人の徳を偲ぶ一端になつてゐる。

又、上人は、特に涙もろく、人の苦しみ、悲しみには、共に涙を流し暖かい手をさしのべて多くの乞食や貧者を救済したり、畜類までも同様に憐れみ、のら犬、のら猫は申すに及ばず、ネズミ取りに入つたネズミまでも買い取り、寺に放したりして今様良寛様と言われ、人々に慕われたのである。

又、曲つた事の嫌いな上人で、正しからざる事には、目の色を青銅色に変え、人が変つた様な激しい怒り方をしたが、すぐ平常に戻り何事もなかつた様に、にこにこして人をして深く反省させたものである。

この様な上人にも、人生の悲哀的、悲しい出来事がある。親子の血を分けたひとり娘が二五歳の若さで他界し

たことである。早くに坊守を失い、又、ひとり娘を失つた心情を察するといくら僧侶の身であらうが、涙脆くなるのは当然である。上人は無類の酒豪で、多い時には一晩に二升も口にしたと言われたが、ひとり娘に「そのように飲んで身体に毒^{どく}でしよう。もし身体を壊して、早く死んだら、私一人、とりのこされてしまふでしょう」と一言、言われてから、バタツと一滴も酒を口にしなくなつたと言われた。娘の一言の忠告で自分が長寿を保ち続け、そのひとり娘が、結婚後、四人の幼な子供を残して二十五の若さで死んだ事を悲しみ、上人が好きだった「船頭可愛や」の歌を口ずさみつつ、しみじみと涙を流してゐたものである。

その上人も、昭和二十年、戦争も激しく、物資も極度に不足し敗戦の色濃い年、唐代念仏門の高祖、善導大師の西化と同じ三月十四日、釈尊、宗祖法然上人と同じ八十歳をもつて、念仏の中に、静かに正念大往生をとげたのである。号して「智慧光院正僧正浄蓮社正誉上人満阿寛道大和尚」と称す。

最後に、尊い開拓魂と血の出る様な布教教化をされた先人、先達の業績を決して忘れてはならないだろう。



法然上人の問答から教えを求む(二)

よし むら たかし
吉村 孝

『問 持戒の行者の念仏の数返のすくなく候はむと、破戒の行人の念仏の数返のおほく候はむと、往生ののちの浅深いつかすすみ候へき。

答 めてはおしますたみをささえてのたまはく、このたみのあるにとりてこそ、やふれたるかやふれざるかといふことはあれ。つやつやとなからむたみおは、なにとかは論すへき。末法の中には持戒もなく、破戒もなし、無戒もなし、たた名字の比丘ばかりありと、伝教大師の末法灯明記にかきたまへるうへは、なにと持戒破戒のさはすへきぞ。かかるひら凡夫のためにおこしたまへる本願なれはとて、いそぎいそぎ名号を称すへしと』

私解

問 釈尊が定めた戒めをよく守りながら数少く南無阿弥陀仏を称える人と、戒めを守らずに念仏を数多く行なう人とを比べてみますと、極楽へはどちらが先に往けるでしょうか。

答 法然上人は坐っている畳をおさえていいました。この畳があるために、畳が破れたとか破れないとかいうことが云えるので、全然畳がなければ、破れたとか破れないとか云えないではないか。釈尊がいた頃には定められた戒めがあってそれが守られていたが、現在はその戒がなくなっているのです。戒を守るといふこともなく、又その戒を捨てるといふこともない。ただ僧侶という名前だけがあるのだと、伝教大師は末法灯明記に書いているから、持戒だの破戒だのとあれこれ論議すべきではな

い。このような平凡な人を救うために、積尊は心からの願望として阿弥陀仏の名を称えるように教えられたものであるから、急いで仏名を称えるべきであると、法然法上は念仏以外には何も学ばなくてもよいと教えられたのであります。

『問 念仏の行者等、日別の所作において、こゑをたてて申人も候。ここに念してかすをとる人も候。いづれおかく候へき。』

答 それは口にも名号をとなへ、ここにも名号を念することなれば、いづれも往生の業にはなるへし。たし仏の本願の称名の願なるかゆへに、こゑをあらわすへきなり。かるかゆへに経にはこゑをたえず十念せよとて、釈には称我名号下至十声と釈したまへり。わかみにきこゆるほとおは、高声念仏にとるなり。されはとて、譏嫌をしらす、高声なるへきにはあらず、地体はこゑをいたさむとおもふへきなり』

私解

問 念仏する人々の中に、毎日のお勤めの時に、声を

たてて念仏する人もあり、又心に念じて声を出さずに数をして称える人もありますが、どちらがよいのでしょうか。

答 それは口でも南無阿弥陀仏を称え、心にも南無阿弥陀仏を念ずるとすれば、それはどちらも極楽浄土へ往くための修行である。但し釈迦牟尼仏の本願は声を出して阿弥陀仏の名を称える事である故に、声を出して称えるべきである。このようなわけであるので、經典には声を絶やさないで仏名を十回称えよと説き、解釈には「上は我が名号(阿弥陀仏)を続けて称え、下は十声を称えるに至る」と仰せられた。自分の耳に聞える程度であるならば、高声念仏であるとしている。そうかといって、人がそしめるのも気づかず、高声を出すべきではない、本来は声を出して念仏するようにすべきであると、法然上人は教えております。私達はこの教えの通り、必ず声を出して南無阿弥陀仏を称えましょう。しかも近くの人が迷惑するほどの大声を出すべきではないと云われておりますので、その程度はよくわかります。

『問 日別の念仏の数返は、相続にいはるとは、いかはからひ候へき。』

答 善導の釈によらは、一万已上は相続にてあるへし。たたし一万返をいそぎ申て、さてその日をすこさむ事はあるへからず、一万返なりとも、一日一夜の所作とすへし。総しては一食のあひたに三度はかりとなえむは、よき相続にてあるへし。それは衆生の根性不同なれば、一准なるへからず、ころさしたにもふかければ、自然に相続はせらるる事なり』

私解

問 毎日称える念仏の数を、相続（この場合は心の底から念仏を続けて行なうこと）しているといわれるのには、どのように考えたらよいでしょうか。

答 善導和尚の解釈によれば、一万以上仏名を称えれば相続といえるであらう。但し一万返の念仏を急いで申して、今日はこれで済んだというような事をしてはならない、一万返の念仏といっても、それは一日中のつとめとしなければならぬ。それについて法然上人は、およそ一食の間に三回ほど称えれば、よく相続したといえるであらう。善導和尚は一日に一万以上といい、法然上人は一食の間に三回ほどでよいといって、両者に大分の差

があることをここで解説したものです。つまり、大衆の一人毎の性質が皆同じでない（仏教經典には衆生の根性不同という文字が多く見られます）、その教えの受け方が皆異なり、同じ程度、同じ種類のものであつてはならないので、その志が深ければ、自然に相続はできるものであると、教えられております。要するに途中で念仏をやめてはならないということです。

『問 礼讃の深心の中には、十声一声必ず往生を得、

乃至一念疑心有ることなしと釈し、また疏の中の深心には、念々に捨てざるは是れを正定の業と名つくと釈したまへり。いつれかわか分にはおもひため候へき。

答 十声一声の釈は、念仏を信するやうなり。かるかゆえに信おは一念に生るととり、行おは一形をはけむへしと、すすめたまへる釈也。また大意は一発心已後の釈を本とすへし』

私解

問 礼讃（仏と法と僧を礼拝して、その功德を深く心に感じてほめること）の深い心の中には、十度から一度の念仏

必ず極楽に往くことができる、なお少しの疑念の心もあつてはならないと解釈し、また疏（説き明かした書物）の中の深心の解説の所には、一度の念仏毎に心の底から仏名を称える行ないを捨てなければ、これが本当の念仏する時の姿であると解釈しております。この二つの中のどちらを定めて行なつたらよいでしょうか。

答 十度から一度に至る念仏は、念仏を信ずる姿である。この故に念仏を称える心は一度の念仏で極楽に往くことができると思ふべきであり、その行ないは一生継続して決して途中で休んだりやめたりしないでやるべきであると勧められた解釈である。又質問の大体の意味は一度念仏を行なう心が起きた時のことを説き明かしてそれを本とすべしと云つたものであると法然上人は教えております。間の二つの事柄は別々に解釈すべきものではなく、共に一つの念仏が形（礼讃の念仏）と心（深心の念仏）と二つの面から説かれていきますので重要な教えの一つであります』

『浄土』八月号の「問 余仏余経について」の答えの中に重要な事を落しましたので、ここに書添えます。

これは、私解の答の所にある文章です。

『自分の心が阿彌陀仏の本願に救われて、必ず極楽往生ができると信じることができていれば、他の善根に縁を結んで助成しても、それは全く雑行となるべきものではない。それはわが浄土宗で説く往生の助けになる行ないとなるべきものである。釈尊は他の善根を行ずる人に喜んで随いその人を賛美せよと説明されているので心得べきことである』

この文意は、自分の心は阿彌陀仏の本願に救われているので、これでよしと思ふことができるれば、他の宗派の善根の人に助成することは決して雑行とはなるべきものではないということ、これについて善導大師は次のように云っております。

『上品を欣ぶ事、我身の為にあらず、彼の国に生れをわけて、かえりて疾く衆生を化せむか為也。是仏の御心にかははさむや』

この意味は「上品に到達して喜んで心がうきうきすることは、決して自分自身の為ではなくて、自分が極楽浄土に往くことができたら、次には汚れている凡夫の世界に一直線に戻ってきて、衆生を教化して仏道に導き入れ

て、その人も亦浄土に往かせてあげるその為である。これが仏の御心に叶っていないことであらうか、必ず叶っていることである」ということです。

この一節は仏法で最も重要な事で、その理由は、『法華経』には修行者の段階として声聞・縁覚・菩薩の三つに分けてあり、この中で声聞と縁覚は小乗の人で自分の事だけを考えている人で、大乘の修行者と云われる菩薩は、布施といつて人に仏法を教えて仏道に導き入れることが声聞・縁覚と異なる所です。「かえりて疾く衆生を化せんが為」とはこの事を善導大師は云っておりますので、法然上人もこれを重く見ていますので、念仏だけを勧めていながら『三部経大意』の中にはこの一節を引用して仏の御心に叶う廻向発願心の真意を教えております。

私達の現在には法然上人の時代とは異なり、平和に恵まれた中で念仏修行をしているのですから、自分だけが極楽浄土へ住ければよいということではなく、仏の御心に叶うように他の人を一人でも多く念仏の道に入れてあげ、共に浄土に住きたいものであります。これが菩薩が最も勝れた行とされている布施を行ずることにもなるのであります。

○ご案内

晩秋の趣きひとしお折柄、皆様いかがお過ごしでしょうか。

さて本誌でも、諸方面より要請もありまして、「浄土句集」のコーナーを設けることになりました。選者には、ホトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思います。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人讃仰会宛



念佛ひじり三国志

(四三)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

建久三年十一月二十五日の早旦。

熊谷次郎直実は老臣の皆野重兵衛ともども朝粥を食していた。重兵衛は昨夕、封地の熊谷から駆けつけたものだ。今日の評定が気がかりで、おちおちしておれないのである。

「若さま、今日いちにちは猿になって下さりますように」

重兵衛はすでにこの言葉を、朝粥の座だけで二度くり

返している。

「猿になれか」

「見ざる、聞かざる、言わざるか」

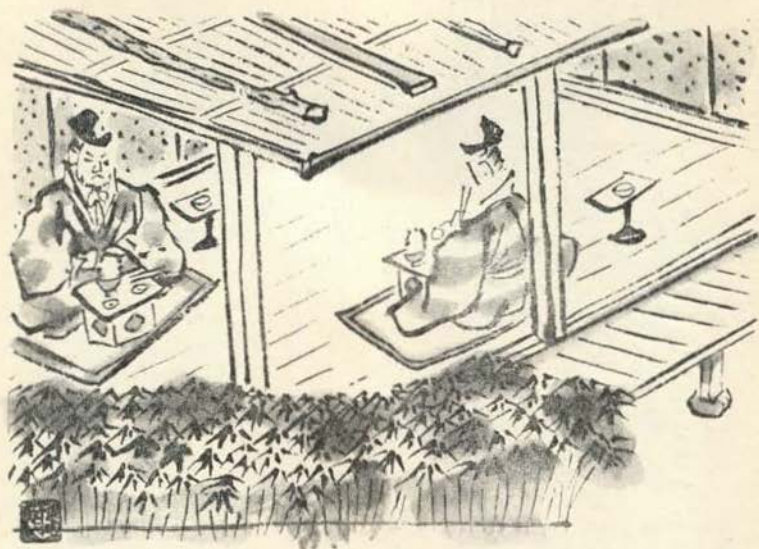
「お黙りになっているだけで事はうまく運びます」

「將軍家の御前でのお対決を此方から願ひ出ながら、黙んまりも妙なものだな」

「かまいませんぬ。どうせ直光さまは存分におしゃべりになります。半ばは若さまのお言葉と將軍家ではお取りになるでしょう」

「此方は黙っていて、相手ばかりにしゃべらせるか」
直実は微笑んでいる。

＜朝餉をとる直実＞



前号のあらすじ

熊谷二郎直実は熊谷郷—今の埼玉県熊谷市のあたり—の領主であり、その所領を継いだのは十八歳の頃であった。平治の乱では統領源義朝に従ったが源氏は敗れ、直実は叔父久下直光の代役として人質同然の大番役のために上洛しなければならなかった。上洛して後は平知盛の直臣となって、頼朝討伐にも参加している。頼朝が千葉勢の支援を得て巻返しに出て来たときには頼朝に降し、以後一ノ谷の合戦まで常に最前線にあつて一番槍を競った。

この生きざまから、源氏や平家に対する忠義は見出せない。いわゆる鎌倉武士の「一所懸命」、ただだ領地の保全と拡張とが直実の願ひであつた。その直実が領地への執念を断つて出家となるには、叔父の直光との領地争ひでの不利の結末以上の苦悩があつたはずである。法然上人門下でも有数の念仏ひじり—蓮生房—となるまでには、まだ遠い道のりがあつた。

永年にわたつて領地境の係争をくり返してきた直実と叔父の久下直光だった。いよいよ今日、將軍頼朝の面前で決着をつけようというのである。

この御前評定へ持ちこめただけで、熊谷の重臣たちは半ば成功と考えている。これまで、ことに戦後、鎌倉の裁定はつねに熊谷側に不利だった。理由は久下直光と密接な梶原平三景時のさしがねと熊谷家臣団は見ている。

將軍頼朝への直訴。

頼朝には源平の戦乱時における直実への印象が強烈だ。いわば寵臣の一人でもある。政治ベタな直情径行な性向を、むしろふた心のない純粹さにとってくれるはずである。

ただ問題は、直実が評定の席で短気をおこしてぶちこわされることだけである。

老臣の重兵衛は主君を凝視した。

相変らず直実は口もとに柔和な笑みをうかべていた。すでに粥の箸を置き、ぼうようと何処かを遠望する。

へんに落着き払った様子が重兵衛には無気味だった。

「爺よ」

「はい、若さま」

主従は昔からの呼びかけ言葉で、眼路をむすんだ。

「この直実が、熊谷領から消えたら、どういうことになるのであろうか」

「若さまが熊谷からお消えになる？」

「さよう、わしが逐電してしまふ。あとはお前らで直家を盛り立てて何とかやる。そうになったら、ことはうまく運ばぬであらうか」

「逐電……とはおだやかではございませぬ」

直実の表情が相変らずなごんでいるので、主君の話を重兵衛はただの仮説として受け止めている。

「叔父貴もムキになって嫌がらせをして来ぬであらうが」

「たしかに、若さまと他のお方とは風当たりが違います」

武勇拔群の熊谷二郎直実である。人気も坂東一円に鳴りわたっている。

当然、久下直光はこの甥に強いコムプレックスをいだいている。平穩のままでいると、おのれの存在が埋没しかねない。

たえず境界にいざこざを惹起させる。久下の家臣団に直実への恐怖心をかき立てることだ。まごまごしている、と、二郎に圧殺されてしまうぞ。この緊張感が、言ってみれば久下領に団結心を固めさせる。

直実の長子直家は凡器ではないが、父ほどの豪の者ではない。一ノ谷合戦時が十六歳で、武名を高めるチャンスに恵まれなかった。隣国への印象も柔和なはずである。家督交替が円滑に実現したら、直光との険悪な関係

も解消するかも知れない。

重臣の皆野重兵衛は、瞬時にそこまで計算を働かしてみた。主君直実の意図がどこにあるにせよ、彼が熊谷領から消えることは、隣国との平和を招く一つの方法ではあった。

だが、重兵衛の首は頭上から巨石で叩きつけられてもタテにはふれなかった。

「しかし、若さまあつての熊谷家でございまする」

老臣は声を張った。二郎直実こそは一家の看板なのである。

「もう若さまでもないだろう」

直実は笑っている。

久下側とは逆に、熊谷の家臣団は幼い二郎直実を盛り立て、庄殺されようとする宗家を守り抜いてきたのも事実だ。直実人気の裏には作られた偶像の光りがさしこんでいる。

「さて、出立の支度をするか」

直実は座を立った。

評定は午前中に開廷するのである。時間はなかった。支度、と言っても、毎朝足す用便だけだ。直実は邸の

裏手にある厩へはいった。

しゃがみこむと、昨日の夕景が思い出されてきた。安楽房と住蓮を送って歩いた鎌倉海岸だ。

安楽房は言った。

——阿弥陀如来のいます西の国か。將軍の東の国か、です。

出家するのか、熊谷領主として留任すべきか、の設問だった。

決断を下す以前で、厩にしゃがむ直実は安楽房の人物像を点検している。

いかにも軽い。走湯山で最初に知り合った住蓮房と比較すると、なおさらである。

儒家中東の出自だということだが、すべてに「理」が先走る。禁裡のなかならともかく、人生の根本を決定する信仰の場で、その「理」はどこまで通用するであろうか。

住蓮房は重厚でこそあれ、人間的な迫力に欠けている。性格が控え目なのだろう。せっかく走湯山で熊谷と深く接したのだが、その後はすぐに安楽房を紹介して彼にゆだねてしまった。とことんまで熊谷の心へ喰い入っ

てくる情動に不足する。

直実は厩の板上で力んだ。下腹でつかえていたものが、逞ましい固形物となつて押し出された。快気が全身を包んだ。

「うゝむ極楽じゃ……でも彼奴にはついてゆかぬぞ」

心地良いうめきのあとで、直実は決断らしい言葉を洩らした。

彼奴らとはもちろん安楽、住蓮らの念仏ひじりをさしている。

二

「吾妻鏡」は、この日の様子を以下のように記述している。

熊谷次郎直実ト久下権守直光ト、御前ニオイテ一決ヲ遂グ。コレ武蔵国熊谷・久下ノ境相論ノ事ナリ。直実、武勇ニオイテハ一人当千ノ名ヲ馳ストイニドモ、対決ニ至リテハ再往知十ノ才ニ足ラズ。スコブル御不審ヲノコスニヨツテ、將軍家タビタ

ビ尋ネ問ワシメ給フ事アリ。時ニ直実申シテイワク、コノ事、梶原平三景時、直光ヲ引級スルノ間、兼日ニ道理ノ由ヲ申シ入ルカ。ヨツテ今直実シキリニ下間ニ預ルモノナリ。御成敗ノトコロ、直光定メテ眉ヲ開クベシ。ソノ上ハ理運ノ文書要ナシ。左右ニ能ワズ、ト称シ、事イマダ終エザルニ調度ノ文書等ヲ巻キ御壺ノ中ニ投ゲ入レテ座ヲ起ツ。ナオ忿怒ニタエズ、西侍ニオイテ自ラ刀ヲ取リテ、モトドリヲ除イ、詞ヲ吐キテ曰ク、殿ノ御侍ヘ登リハテ、ト云々スナワチ南門ヲ走り出テ、私宅ニ帰ルニ及バズシテ逐電ス。

老臣たちがおそれていた熊谷の短気が暴発したのである。

評定の座で、直実の言い分はチンブンカンブンだ。たびたび將軍頼朝は問いたただいたのだが、いっこうに要領を得ない。そのうちに直実自身が怒り出し、領地に関した書類を投げ出して座を蹴立てたというのである。

この記述だけから判断すると、座には叔父の久下直光をはじめ梶原平三景時もいる。領地問題を理屈や証書

類で論じ合ったら到底かなわない。熊谷には自説を徹底させる表現力がない。彼らの理詰めな追究にしどころもどろになって、あげくの果てが狂乱状態におち入ったことになる。

だが、記述をそのまま鵜呑みにして良いものであろうか。すくなくとも情況判断で「狂乱の熊谷」ときめつけてしまうのは、事実誤断にみちびく危険性がある。

直実が狂乱状態になったのはたしかであろう。だが、本心から乱れていたかどうかだ。

本心でない証拠に、直実は頼朝の御前を飛び出したあと、敏速そのもので行動をつないでいる。西の控え所で自ら太刀でモトドリを断ち切った。出家したわけだ。その足で南門を走り出て、自宅にも寄らず、どこぞへ逐電を遂げたのである。

「吾妻鏡」は続く記述で直実の行先を明示している。伊豆の走湯山であった。頼朝自身もそこを察知して、御家人に先廻りをさせ、直実の遁世を諫言する。いかにも手廻しの良い処置である。

將軍頼朝はともかく、評定所からの直実はまさしく一つの目的に向けて直進しているのである。それは「出

家」だ。

やり口もひっそりとはない。白昼公然と、衆人環視のなかで出家遁世の意志を公表したようなものだった。関係の証拠書類を投げ出して、「俺はもうこんな下らぬ領地争いなどやめたぞ」「今後は俺の知ったことじゃない」と捨てゼリフで出家剃髪したのである。

荒っぽいがそこには直実の家長放棄、引退声明がある。まさしく公然であって、仇敵久下直光は、梶原景時は、もちろん將軍頼朝までが列らなった座での意志表示だった。

では、なぜ熊谷直実はここまで派手に引退声明をしなければならなかったのだろうか。

小大名の悲哀をそこに見なければならぬ。熊谷領とは号するが、叔父久下直光の領地に囲こまれたほんのひと握りの領地に過ぎなかった。一ノ谷合戦をはじめ、どの戦場への出陣でも直実はせいぜい四、五十騎の手勢しか連れてゆくことが出来ない。だからつねに先陣前駆けだ。堂々の布陣で敵と四つに組むことは不可能なのだ。

小大名——大名ですらなかった。その点、久下直光は

文句のない大名だった。戦後という平和時において、熊谷領はつねにおびやかされていた。大名の領地への併合だ。

何としてもこれは回避しなければならない。

考え出した最後の手段が、直実自身の抹殺であった。

直実は武名が高すぎた。有名人でありすぎる。これでは久下直光は目ざわりでならない。おのれが公然と引退し、家督をわが子直家へ譲渡してしまえば風当たりも弱まろう。これが直実のぎりぎりの計算であった。

この非常手段の結果、熊谷の所領は保たれた。久下家も以後は余り嫌がらせをしなくなった。長子直家は着実に封地を守り、その子直国は承久ノ乱で一族郎党をひきいて出陣している。ただし先陣前駆けの家風は変わらず、いや、それをしなければ存立も危ぶまれるためだろう。勢田の合戦で一番槍で突っこんで戦没した。

熊谷直実の出家遁世を、自領への不満が爆発し、ヤケっ八になって、と意図がえしふうに取るのは無論誤まりである。むしろ一族の温存をはかり、自ら武士の身分を捨てたと考えるべきであろう。

だが直実は、とおりにいっぺんの性格の持主ではなかつた。

た。その出家ぶりも退隠消極とはほど遠い。強烈な前衛の姿勢を崩そうとはしなかった。

鎌倉から走湯山へ走った。

再び「吾妻鏡」の記述をかりる。

走湯山ノ住侶専光房（良邁）使者ヲ進シ申シテ曰ク。直実ガ事、御旨ヲ承ルニ就キテ、スナワチ海道ニ走り向フトコロ、上洛ヲ企ツルノ間、然トシテ行キ逢イ終ンヌ。スデニ法体タルナリ。シカルニソノ性コトニ異様ニシテ、タダ仰セノ趣キト称シ抑留セシムルノ条、カツテ承引スベカラズ。ヨツテ先ズ出家ノ功德ヲ讃嘆シ、次ニ相携エテ草庵ニ誘イ来タリ、同法類ヲ集メテ浄土宗ノ法門ヲ談ジ、ヨウヤクカノ鬱憤ヲ和順セシムルノ後、一通ノ書札ヲ造リ遁世逐電ヲ諫淨ス。

同じ建久三年十二月十一日の条である。

すでに法体となり頭を丸めて伊豆山の走湯山へ駆けこんだ熊谷直実は、しきりと上洛したがっている。それを住侶の専光房は引き留めようとする。

手段として同法類を集めて浄土の法門を談じたりする。ようやく直実の鬱憤はおさまった、と鎌倉へ報告している。

直実の上洛をなぜ諫止しなければならないのか。また浄土宗の宗門を談じた同法類とは誰たちなのであるうか。

おそらく鎌倉側やその代弁者でもある走湯山の専光房は、直実が所領問題で京都の朝廷へ直訴されるのを憂慮したのかも知れない。だが、熊谷上洛のねらいはそんなことではなかったはずである。

同法類が安楽房や住蓮だったとすれば直実は彼らの説得では飽き足らず、彼らの師である法然に直接会って問法することを強く希求したと考えられる。

だがこの時点では思いとどまったようである。

三

伊豆山の走湯山。

天台宗比叡山の東国における別所とした発展した拠点だが、やがて住蓮や安楽房たちの念仏ひじりが浸透して

くるようになった。

さらに後年に至ると、住侶であった浄蓮房源延は法然から「浄土宗略要文」を授与されて、公然と法然義になつてゐる。

「浄土宗略要文」は「選択集」の要約であるばかりか、法然自身が私釈を加えた箇所さえある（三田全信著『浄土宗史の新研究』）と思われるほど、浄土宗にとっては貴重な文献だ。

東国、とりわけ鎌倉における法然義の浸透には見落せぬ拠点であった。また浄蓮房源延は北条義時の墓の開眼供養に導師をつとめており、北条家との深い関係を示している。

法然が北条政子へ与えた手紙。その仲介者が蓮上房尊覚となつてゐる。浄（上）蓮房源延とは時代も異なるが、この尊覚が不明な人物だけに走湯山にいた念仏者という推量も加えたくなるではないか。

「四十八巻伝」では走湯山の妙真という老尼を紹介している。

妙真は法華の持者、真言の行人であった。たまたま上洛のとき、法然上人の教化に預かり、余行を捨てて念仏

ひとつに帰した。

知恩院の義山はその「翼賛」でこんな注をほどこしている。

——このごろ男女道俗のなかに法華經の持者、世に多かりき。なかんずく伊豆相模あたりには盛んに行われけるにや。鎌倉勤仕の武士の中にもママありて東鏡（吾妻鏡）などに見えたり。走湯山は熱海の湯本の奥、石橋山の近辺、箱根の南の海にさし出たる山なり。頼朝卿崇敬の地なり。またこの山に法長という尼ありて、二位の禪尼（北条政子）の御経師として一生不犯の持経者なる事東鑑に見えたり。この妙真もまたその類の人なるべし。九卷伝に熊谷入道初めは走湯山に参籠しけるが、上人（法然）の念仏弘通の次第を京都より下れる尼公の語り申しけるを聞きて、上洛すとあり。もしくはこの人なるか。

浄蓮房源延が出張する以前でも走湯山には念仏ひじりたちが幾人か常在していたことが立証される。同法類を

集めて浄土宗を談じようとするれば、ひと声で幾人も立ち現れたことであろう。

しかし熊谷二郎直実は、彼ら念仏ひじりたちの説得だけでは得心がいかなかった。

直実は「誇り高き武士」であった。説得だけで篤心者になる短絡的な男ではない。

「おぬしらがふたこと目には口にする師の法然、その御房に一度逢いたいものだ。とつぶり問法して得心がいったら、わしこそは海内第一の念仏者になってみせるぞ」

と、広言してはばからない。人生の一大事ではないか。師の法然自身からじかに教えを受けようではないか。

海内第一の武辺者だ。同じ念仏ひじりになるにも海内第一でなければならなかった。安樂房や住蓮の弟子。つまり法然の孫弟子では嫌なのである。

直実がいつ、どんな経路をたどって法然に会ったか。伝記によって多少異なっている。

「四十八卷伝」は先ず聖覚法印を訪ねる。

聖覚法印は、信西入道の子で明通僧都の兄にあたる三井寺の澄憲の実子である。父は当代随一の説教者だった

が、聖賢は学究であつた。後には法然の弟子となるが、当時は未だ一定の距離を置いていたと見え、紹介状一本で直実を法然のもとへ送りこんでいる。

「九巻伝」になると、いまひとつドラマチックな要素を採り入れる。

走湯山で参籠後、上洛した直実は三井寺の澄憲のもとに身を寄せるのである。東山の法然禅室へおもむくまでのあいだ、しきりと刀を磨いでいた。

「何のために刀なぞといでいるんですか。あなたはもう武士ではない。出家した身だ。太刀なぞ必要がないではないか」

と、三井寺の僧がたずねた。

「いや、これは他人を斬るためではない。わし自身の腹にあてるものだ」

「なぜ切腹する必要があるのですか」

「この直実、果たして救われるかどうか。悪業を重ねてきた身である。救われ難たいと言われたら、即座にその場で命を断つ所存なのだ」

と答えた。

この経緯を聞いた澄憲は、すぐに直実を法然へ紹介す

る労をとった。つまり、これまでずっと直実の様子をうかがっていたわけだ。心から後生菩提を願っているのかどうか。

東山の禅室で法然に会い、念仏の功德を聴いた熊谷はさめざめと泣いた。

「ただ念仏をとなえるだけで救われるのですか」

「そうです。間違ひなく救われます」

「それがしは命の一つや二つ、いや最少限でも腕の一本ぐらい斬り落して、救って頂こうと思つたのに、念仏をとなえるだけとは……」

「阿弥陀さまのお慈悲は、どんな人間にでも及ぶものです。その御名をとなえさえすれば平等にお救いの手が届くのです」

「四十八巻伝」、「九巻伝」が三井寺の親子を通して直実を法然に合わせているが、これは外面上の形式手続であつて、法然を志向する直実の心は走湯山にいたころすでに固成していたと考えるべきだ。そこへ至るルートは当然、安楽房や住蓮によって設置されたことであらう。

ただ直実には、鎌倉の御家人という強いプライドがあつた。然るべき紹介者の手をおして、という「格式張

＜西を向いて逆さに馬に乗った直実＞



り」が澄憲や聖覚をわずらわしたのであるう。

直実は蓮生房とあらためた。

熊谷の「格式張り」は念仏者となったあと、強く上品上生の往生にこだわったあたりで躍如としている。

往生には下品下生から上品上生まで九つの方法がある。熊谷がそのトップをねらったのは、

「自分だけが救われたのでは面白くない。極楽浄土へ救われたあと、もう一度この地上へ舞い戻り、衆生を救いへ導く上品上生の往生こそ遂げたいのだ」

いかなる戦場にあってもつねに先陣。前駆けを目ざす性格から発したと考えるべきであろうか。念仏をとнаえる場にあっても、熊谷直実は激しく闘おうとするのである。とにかくエネルギーな男だった。

口だけではない、上品上生往生のために直実は何でも実行する。

京都から関東の熊谷へ帰ることになった。馬上でゆく直実は、姿勢を逆さまにした。つまり馬首に尻を向けて騎ったのである。

「殿、危のうござります。馬にふり落されます」
家臣が驚いて駆け寄る。

「なあに手綱を握りしめているから大丈夫じゃ」

「でも、なぜそんな恰好でお騎りになるのですか」

「いいか。よく聞けよ。これからわしは東国へ向って旅するのだ。ということは阿弥陀さまのいます西方浄土へ尻を向けることになる。上品上生を願う身は片時も阿弥陀さまから眼を放してはならないのだ」

西方浄土へ尻を向けぬために熊谷直実はい長い東海道の道中を、逆さまの姿勢で下っていったのである。

昭和三十七年の四月二日、奈良市興善寺の本尊ご胎内から発見された法然上人の書簡。それは正行房という念仏ひじりにあてたものだった。

正行房がどんな人物であるかは一切不明である。

書簡の内容は正行房が熊谷直実を紹介して欲しい、と法然に依頼したことへの返書だった。

昭和三十七年と言えば、法然上人七百五十回忌の翌年にあたる。興善寺の住職が折からの長雨で本堂に雨漏りがし、本尊仏を他へご転座させようと持ち上げたとき腕がすっぽりと脱落して、ご胎内の書類を発見したのだという。八百年近い歳月を経ての偶然的発見であった。

謎の念仏ひじりと考えられた正行房。相変らずこの書

簡からは正体を明らかにしないが、彼が法然に紹介を依頼した熊谷蓮生房直実とのあいだに太い綱で結ばれている事実にわれわれは気づくのである。歳月をこえた何ものかが伏在している、と一驚しないわけにはいかな

い。正行房が法然伝に登場するのは、ただの一方所しかない。それは関白九条兼実に関連したくだりである。

(つづく)

新刊『共励五十記帖』

B4判 一六〇頁(ケース入り)

表紙 ワインカラー裂地金文字題字

頒価 一〇、〇〇〇円(荷造送料共)

申込先 〒108 東京都港区三田4-4-17

書道共励会

(振替東京 七七四四七)

二 編集後記 二

○行く秋の情趣はなんとも形容しがたい。人の心に漂う情感は、惜しまれる晩秋の暮れ時に寄せて、紅葉銀杏の枯れ葉がハラハラと舞い散るように定めないものであろう。「ひき潮」という映画があつたが、私も今、なにもかもが消えうせた秋の終りのさめた海辺に佇んでいる。確かに、中島みゆきの唱うように、春、夏、秋は「冬を待つ季節」である。かくして、私は、哀愁の想い出をひとり心の世界に昇華して、隣り合わせの冬の到来をただ静かに待つばかりである。いやむしろ、訪れる冬の季節を心から待ち望んでさえいる。

行秋や日々に願さの北の海 月斗

沖の灯のまたたきくらし冬隣 逸宇

○ところで、かねてより誌面の中でもたびたびご案内してきた「浄土俳壇」のコーナーも、〃浄土句集〃という表題のもとに、いよいよ来春の新年号をもってスタートい

たすつもりである。既報の通り、選者にはホトギス同人の一田牛畝師（福岡市中呉服町、正定寺住職）をお迎えして、季節観豊かな読者諸兄の秀句を順次に選句掲載させていただく次第である。一田師は、俳誌『冬野』を主宰され、ことに永年に渡つての死刑囚への教誡活動やその俳句指導の努力は並々ならぬものがあり、今春には藍綬褒賞を受賞されている。ともかく、句作についての心得の少ない方でも、折々の心境を十七字に託していただき、ふるって投句してはしいものである。

○さて会員諸兄からのお便りも、相変らず激励や要望の声援が多い。神奈川県箱根の蚊野智法尼さんや、山口市の南寛我氏なども、ご高令に鞭打って『浄土』誌の一ページ一ページをひもといでいただいている。ことに南氏は、『浄土』創刊号以来の暖かい愛読者である。弊会も、このような多くの善意に囲まれて、微力ながらも雑誌刊行等に全力を傾けているわけである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年十月二十五日 印刷
昭和五十二年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

＝好評発売中＝

大正大学教授 竹中信常著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円

◎宗教学界の權威である著者が、新しい角度からタブー理論を集大成され、さらに数々の身近な事例を踏まえて体系的にまとめられた大書である。皆様のご購読を是非おすすめしたい。

発 行 山喜房仏書林

東京・本郷・東大赤門前
電 話 (03) 811-5361

『和訳善導大師観經四帖疏』村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・註解つき

『浄土宗 舊 備 の お つ と め』

折本68頁 定価190円 (100部以上一割引)

折本80頁 <小消息つき> 定価220円 (100部以上一割引)

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振 替 (東京) 8-82187